だいえっと・でいず

キンコーン、キンコーン。
澄んだ音色のチャイムが響き渡る。
しかし、その音色を打ち消すかのように、ドタバタと駆け回る音が重なった。
「さくら、急がんとユーザーさんが待っとるで」
「わ、分かってるよっ！」
うにゅうのフォローに対して、御影さくらが焦った様子で答えた。
ここは、御影さくらの部屋である。
ベッドや机が揃い、女の子らしいインテリアで整えられた部屋は、いつもは綺麗に整頓されているのだが、今はあちらこちらに服が散らかり、元々の整頓された様子は見る影も無い。
というのも、先ほどからデスクトップへの呼び出しが掛かっており、彼女は絶賛準備中なのだった。
御影さくらは、急いだ様子でクローゼットからいつもの服を取り出すと、すぐさま袖を通していく。
「何で、もっと早く起こしてくれなかったのっ！」
うにゅうに向かって愚痴をこぼす御影さくらだが、彼女にも責任が無いわけでもない。今日に限って、思いっきり寝坊していたのである。
「何回も起こしたやないか。揺さぶっても、叩いても、さくらは全然目を覚まさんかったで」
「だからって、胸を触るなんてヒドイと思うんだけど」
服のボタンを留めながら、御影さくらはジト目でうにゅうを睨み付け、口を尖らせた。
「そうでもせんと、さくらは目を覚まさんやろ」
不機嫌な御影さくらを横目に、うにゅうは悪びれた様子も無い。
「うーっ、覚えてなさいよ」

そんなやり取りを続けているうちに、御影さくらの着替えも終わりつつあった。しかし、最後に腰のリボンを結ぶところで、御影さくらの動きがピタリと止まる。
「むむっ…」
御影さくらは難しい表情のまま、リボンを結んだり、解いたりを繰り返している。
「…？　どうしたんや、さくら」
不審に思ったうにゅうが、御影さくらに問いかける。
「リボンがキツイかも…」
「…は？」
御影さくらがポツリと呟いた内容を、うにゅうは即座に理解できなかった。
「さっき、スカートを穿いた時も少しきついなーとは思ってたんだけど、まさか…」
「何や、太ったっちゅう事か？」
ぽすっ！
どうやら図星だったらしく、御影さくらは少し顔を赤らめ、うにゅうに軽く拳を落とす。
「うぐっ、痛いやないか。せやけど、今頃気が付いたんか？」
「え、今頃って、どういう事？」
意外なうにゅうの言葉に、御影さくらが目を丸くした。
「最近、ふくよかな感じになってきとったんで、さくらも気付いとると思っとったんやけどな」
「う、嘘っ？」
衝撃的な一言に、御影さくらは動揺の色を隠せない。自分でも気が付かなかった事を、相方であるうにゅうに指摘されたというのは、かなりのショックだったようだ。
「まあ、さくらは育ち盛りなんやし、気にせん方がええんちゃうか？」
うにゅうは、立ち尽くす御影さくらに対してフォローを入れるが、彼女の耳には届いていないようだった。
「やっぱり、アレが良くなかったんだ…」

それだけ言うと、御影さくらは、膝から崩れ落ちるようにして床にペタリと座り込んだ。
「思い当たる節があるんか？」
「アーモンドチョコを一日一箱食べてた」
「それだけか？」
「毎日、ケーキ食べてた」
「…他には？」
「最近、お餅もおいしくて、たくさん食べた」
「餅？」
「いそべ、きなこ、からみ、あんころ、おしるこ…」
「…もうええわ」
止まる事の無い御影さくらの独白に、さすがのうにゅうもぐんにょり気味だった。実際のところ、うにゅうから見て、ほとんど体型は変わっていない。御影さくらも年頃の女の子である。おそらくは、成長に伴う体型の変化に違いなかった。
「こうなったら、ダイエットするよっ！」
御影さくらは、ぐわっと立ち上がると、拳を握り締めながら、そう宣言した。心なしか瞳に炎が見えるのは気のせいだろうか。
しかし、無駄に闘志を燃やす御影さくらに対して、うにゅうは冷静にツッコミを入れる。
「こんな事しとる場合か。はよう、デスクトップに行くで」
「わわっ、ちょっと待ってよっ！」
いきなり興を削がれた御影さくらは、慌ててうにゅうの後を追いかけた。

☆